

焼き払われた自宅の跡に シンクとジャムの缶だけが 残っていました

当時の赤坂区や麻布区の大半が焼失した、昭和20（1945）年5月25日の東京山の手大空襲。焼夷弾が降り注ぐ中を、当時6歳の中西さんは、母親に手を引かれながら、弟とともに防空頭巾に水をかぶって逃げ回ります。そして、逃げ込むはずだった防空壕へは入れず、広い練兵場だった代々木公園へも向かえず、やむなく青山墓地へ逃げたことが、たまたま家族の生命を救うことになりました。焼け野原となった戦後の街で、過酷な状況を生き抜いた少年は、ジープで通りかかった占領軍の米兵に、蓮（は）の花を差し出すのです。

戦争体験者

中西寿一（なかにし・じゅいち）さん（85歳）



昭和14（1939）年、青山南町（現・南青山）生まれ。父・母と、弟との2人きょうだい。父親は出征し、母親との3人暮らしで子ども時代を過ごす。6歳で東京山の手大空襲に遭うが、青山墓地へ逃げて助かる。自宅は全焼し、親族宅へ移り住む。赤坂見附へ転居後、永田町小学校、麹町中学校へ進み、高校卒業後、就職難の中で航空自衛隊に入隊。技術者として誘導管制システムの業務を担当する。60年安保闘争など、社会情勢のうねりに接したのち、5年ほどで除隊。その後は、情報システムや電子機器を扱う日米合併企業で働く。

interview

中西寿一さん

撮影場所 ● 港区役所

後ろに見える芝公園は徳川家霊廟の跡。壮麗な建築や五重塔など、空襲でほとんどが焼失した。



古山智（ふるやま・ち）さん

山崎詩歩（やまざき・しほ）さん

両親ともに東京なんで
ずっと青山に住んでいました

山崎——中西さんが生まれた頃、青山はどのような街でしたか？

中西——木造の家が広がっている、ふつうの住宅地でしたね。にぎわいなんてのは、あんまりなかったんじゃないかな。これは、昭和10（1935）年の地図なんだけど、ほら、今の表参道のまわりにも民家がいっぱい建ってるでしょ。今の国道246号（青山通り）沿いも、お店は少しあったけど、人はそんなに通らない静かな道。路面電車（市電・都電）は走っていたかな。

山崎——そんな落ち着いた環境で、どのような暮らしを？

中西——住んでいたのは、今の南青山5丁目あたり。俺と弟、おふくろと親父の4人家族です。親父は麻布の生まれで、俺が生まれた頃にはもう中国へ出征してました。おふくろも赤坂の生まれ。つまり両親とも

に港区なんで、戦争が激しくなってきたから、疎開することなく、ずっとこのあたりで暮らしていたわけです。

山崎——お父さまの出征はいつ頃でしたか？

中西——太平洋戦争が始まった時に、やっと2歳だったから覚えてないなあ。いつ復員したのかも、実はよくわからないんですよ。

山崎——その頃の食事のことなんかも？

中西——どうも記憶にないですね。

山崎——空襲へは何か備えをしていましたか？

中西——近所のお母さんたちが白い割烹着（かつぽうぎ）を着て、バケツリレーの練習をしていたのは覚えてます。このあたりは全部木造だったから、空襲による火災を警戒してたんですよ。うちの前には、防空壕もありました。

山崎——自宅の前にはですか？

中西——数人しか入れないような、狭い防空壕だったけどね。「何かあった時は、ここに逃げようね」と、おふくろや弟といつも話してたものです。



幼い頃の中西さん（写真左）と母と弟、昭和16（1941）年頃

防空壕に入っていた人たちは
みんなやられてしまった

古山——実際に空襲に遭われたのは、いつですか？

中西——昭和20年の5月25日、6歳の時。いわゆる東京山の手大空襲だね。焼夷弾が

降ってきて、おふくろと弟と3人で防空頭巾をかぶって逃げました。うちの父親もそうだけど、働く世代の男は、その頃たいいてい戦地に行かされてたから、まわりで逃げてるのは、たいてい女と子どもと高齢者ばかり。夜だから足元は暗くてよく見えないけど、いたるところで火が燃え盛ってる。

そんな中を右往左往しながら、大勢の人が逃げ回ってるわけです。今の代々木公園のあたりは、陸軍の広い練兵場だったから、表参道からそっちへ逃げる人もいたけど、俺たちは青山墓地の方に向かった。赤坂青山警察署の前にあった防火用水の水を頭巾の上からかぶって、必死で逃げたね。

古山——どうして防空壕へ逃げなかったんですか？

中西——それがなぜだかわからないんだけど、近所に住んでた誰かが先の中へ入っていたんじゃないかな。だから、どこか他へ逃げるしかなかった。でも、その防空壕

は結局潰れてしまい、中にいた人は全員亡くなってたんです。

山崎——そんな……。

中西——もしあの時、俺たちも防空壕へ逃げていたら、家族もろとも死んでたんだろうね。たまたま運が良かっただけのこと、戦争ってほんとに恐ろしい。

古山——街や人は、どんな様子でしたか？

中西——青山墓地へ逃げながら渋谷の方角を振り返ったら、火の手が上がるのが見えました。逃げられなくて暴れてる馬も見ただけ、あのあたりに馬を飼うところなんてないし、どこにいた馬なんだろう。あるいは軍馬だったのかなあ（当時、警察の厩舎が青山にあった。後になって、青山通りには遺体がたくさん並んでたと聞いたけど、自分の記憶にはない。ただ、道ばたで女の子がうずくまって亡くなったことは、よく覚えています。

古山——夜が明けて、どうされたんですか？



中西——戻ったら、すっかり焼け野原で、家も何もかも焼けちゃった。でもね、台所にあったシンクと、その下にしまったジャムの缶だけが残っていたんですよ。今なら、甘いものなんて当たり前前に食べられるけど、あの頃はほんとに貴重でね。避難してるときに「戻ったら食べようね」と母親に言われ、楽しみにしてたジャムなんです。なのに、缶だけ残り中身はなくなってた。まさかみんな焼けてしまうなんて想像もしてなかったから、すごくショックだったな。

山崎——焼け野原になった街に、どう感じましたか？

中西——何もかもなくなった、っていうだけで、切迫感のようなものは、特になかったですね。飛行機が何機も空を飛んでたのは覚えているけれど、それがどういう意味なのかもわからなかった。まだ、おふくろに手を引かれるだけの子どもだったんですね。

古山——その後は、どうされたんですか？

中西——赤坂見附にある、おふくろの実家へ避難しました。そのあたりも相当焼けていたけれど、バラックは何軒もあったから、青山よりはまだマシだったのかも。玉音放送を聞いたのも、その家でした。おふくろや祖父たちはラジオの前で泣いていたけれど、どっぴり意味なのかもわからなかったね。

買い出し帰りの満員電車

荷物を持ってくれた人は消えてしまった

山崎——戦後も配給が続いたそうですね？

中西——お米、お酒、卵、魚なんかは、まだ配給でした。お米は米穀通帳を持って並んだんじゃないかな。野菜も足りないから、おふくろが大事にしてた着物や琴、三味線といった嫁入り道具なんかも質に入れて、そのお金で買い求めてくれたんです。ただ、買い戻そうと思った時には、すでに質屋が処分してしまったこともあったね。

山崎——配給だけでは生きられないわけですね。

中西——郊外へも、よく買い出しに行きました。新宿から小田急に乗って海老名とかの農家まで出向き、やはり着物なんかとの物々交換で、お米や野菜を仕入れてくるわけ。畑に生えている野生のフキやノビルを勝手に取って、叱られたこともあったね（笑）。帰りの満員電車で荷物を持ってくれる親切な人がいたんだけど、新宿に着いた途端、荷物ごと消えてしまったこともあったっけ。

古山——ひどい！

中西——俺と弟を連れてたから、おふくろは大きな荷物を持ちきれず、手伝ってもらえてありがたいと思っただけじゃないかな。ひどい話だけど、みんな生きるために必死だったんでしょね。それでも飢えで死んでしまう子どもが大勢いた時代に、そんなにお腹を空かせた記憶はないから、たぶん、おふくろが頑張って食べさせてくれたんじゃないかな。でもジャガイモの皮のおかゆは、

苦くて食べられなかったね。

山崎——えっ、皮だけですか？

中西——ジャガイモの皮を入れておかゆにして食べるんだけど、もう苦くて苦くて食べられなかった（笑）。

山崎——学校はどうされたのですか？

中西——父方の伯父がいた池袋へいったん移ったので、豊島師範（東京第二師範学校…東

京学芸大学の前身）の附属小学校へ入りました。

そこでよく遊んでいたのが、「木炭自動車」。当時は石油も足りなかったから、木炭を代用燃料にして走れるよう改造したバスやトラックがけっこう多かったんだ。池袋には坂が多いんで、みんなよく坂の上まで乗っかって楽しんだものです。

半年ほどで赤坂見附へ戻り、都営住宅へ



食料を手に入れるため、郊外の列車に無理やり乗り込もうとする人々たち。昭和22（1947）年7月31日撮影（提供：昭和館、所蔵：米国国立公文書館）



木炭自動車の燃料を燃やすタクシー運転手。新橋駅前（所蔵：港区立郷土歴史館）

の国際医療福祉大学付近に移り住んでからは、赤坂小学校のプールで泳いだり、軍の倉庫跡で銃の燃えかすを探して遊んだりもした。メンコやベーゴマ、ザリガニ捕りもやったなあ。

山崎——子どもたちは、甘いものが欲しかったんじゃないでしょうか？

中西——当時の赤坂には麦も生えてて、その実を取って口に入れると、ネバネバしてくるんで、それをガムみたいにして噛んだものです。

でも、そんな代用品じゃなくて本物のお菓子は、米兵からじゃないとまず手に入らない。赤坂や六本木、永田町には占領軍の宿舎がいくつあって、米兵も多かったんです。俺たちが遊んでいるあたりに米兵がジープに乗ってやってくると、「ギブ・ミー・チョコレート！」なんて言いながら追いかけるわけ。それでもしないと、チョコレートやガムなんて食べられなかったからね。

そりゃおいしかったけど、その頃、そういう子どもはたくさんいたんじゃないかな。

自衛隊の制服姿では街を歩けず
自宅へは私服で出入りした

古山——進学後はどうされたのですか？

中西——高校を卒業し、いろいろな悩んだすえ、航空自衛隊に入りました。同じクラスの男子で大学に行かなかったのは、俺を含めて2名だけという時代。ひどい就職難だったし、大学へ行こうとしたんだけど、年子の弟もいて家にそこまで余裕がなく、まず働き口を、という選択だったね。先生からお前の体力だったら自衛隊がいい」と勧められたのと、衣食住が保証されることも大きかったかな。

古山——自衛隊では、どんな仕事に就いたのですか？

中西——GCA (Ground Controlled Approach) : 着陸誘導管制) という、飛行場へ正

確に着陸できるよう 飛行機の高さや速さをリーダーを見ながらコントロールするシステムの整備業務です。技術を学びたかったから、銃を持つような訓練には行かないようにしてたね。リーダーが配備されている浜松、入間、松島、千歳の各基地を転々として、4年8カ月で自衛隊を辞めました。

山崎——どうして退職されたのですか？

中西——うーん、ひと言では答えにくい質問ですね。入隊した頃はよくわかってなかったんだけど、その頃は、平和憲法や核実験、冷戦とかをめぐっていろんな考えがぶつかり合う、60年安保闘争の時代だったんですよ。みんなが戦争とか政治とかについて考えて、自衛隊への評価は警察や消防よりずっと低い中で、自分の気持ちを保てなかったから、という答えになるのかな。たとえば、自衛隊の制服姿で街を歩いてると、人の視線が冷たく感じられてしまうんだよね。仕方がないから、自宅からは私服で出て途中

山崎—— どうして退職されたのですか？

中西——うーん、ひと言では答えにくい質

問ですね。入隊した頃はよくわかってなかったんだけど、その頃は、平和憲法や核実験、冷戦とかをめぐっていろんな考えがぶつかり合う、60年安保闘争の時代だったんですよ。みんなが戦争とか政治とかについて考えて、自衛隊への評価は警察や消防よりずっと低い中で、自分の気持ちを保てなかったから、という答えになるのかな。たとえば、

自衛隊の制服姿で街を歩いてると、人の視線が冷たく感じられてしまうんだよね。仕

コラム 16 ● 占領下の米軍施設

降伏後、占領統治された日本では、連合軍の司令部や行政機構などが、都心部の建物や軍事施設に置かれました。とくに、戦前からアメリカ大使館があった港区には、旧軍の連隊や練兵場が集中していたこともあり、その多くが米軍に接収されることとなります。たとえば、二・二六事件の舞台にもなった赤坂の「山王ホテル(現・山王パークタワー)」は宿泊施設および宿舎になりました(現在「ニューサンノー米軍センター」として南麻布に移転)。「第一師団歩兵第一連隊・同第三連隊」は「ハーディ・パラックス(現・東京ミッドタウン、国立新美術館など)」になり、米軍将兵の宿舎として戦後も長く用いられました。その一部は、ヘリポートや星条旗新聞社などとして現在も運用されており、東京都や港区は撤去を要請しています。



進駐軍家族のための住宅「ジェファーンソン・ハイツ」
(提供：昭和館、所蔵：米国国立公文書館)



コラム 17 ● 60年安保闘争 (あんぽとうそう)

戦後の日本が独立国として国際社会に認められた、昭和26(1951)年のサンフランシスコ平和条約の締結時に、冷戦を背景として在日米軍を恒常化する日米安全保障条約も同時に結ばれました。その内容の改定を昭和35(1960)年に控えた、当時の政権の国会運営のあり方をめぐり、政党や労働組合だけでなく、多くの市民や学生などが反対のデモを連日行う、大きな社会運動が広がっていきます。そして、国会での強行採決や、デモ隊によるアメリカ大統領の秘書官の包囲などを経て、同年6月15日には、国会へ突入した学生たちと機動隊が衝突して、女子学生が死亡する事件が起きます。その後、新安保条約は自然承認となり、内閣が総辞職することで、運動は退潮していきました。



新安保条約に反対し、国会議事堂前に集まったデモ隊。
昭和35年6月18日(提供: 共同通信社)

で制服に着替える、なんてこともやってたんですよ。辞めたあとは、情報システムや電子機器を扱う日米合併の会社に入り、定年まで勤めました。

**国と国とのメンツ争いで死ぬのは
民間人であり、人間であり、
子どもである**

山崎——ウクライナやガザでは、今も空襲が行われていますね。

中西——あれが戦争なんだよ。「技術が発達してるから、民間施設には爆弾を落としません」なんて言っているけど、そんなことできるわけなくて、結局は無差別の状態でしょ。相手側も、民間人を盾にしながら地下へ潜ってるんだから、どうしたって民間人が犠牲になるに決まってる。戦争は国と国とのメンツ争いだけど、死ぬのは、民間人であり、人間であり、子どもなんだよね。

山崎——港区では、ウクライナの人を避難民

として受け入れていますね。

中西——それ自体は、もちろん良いことだよ。でも、男性はみんな戦争に行っちゃっているから、実際に日本へ来ているのは、女性と子どもたちなわけです。南青山にも、ウクライナの人が何人かいてね。地域のお祭りやイベントなんかへ、区の人とかが連れてくることがあります。もちろんみんな、彼らを温かく迎えるはするけれど、だからといって、家族が戦地へ行って帰らないとか、身内が爆弾で亡くなったとか、そういう凄惨な状況や、深い悲しみまではわかるはずがない、ともいえるわけじゃないですか。

日中戦争に当たって、太平洋戦争に当たって、当時の写真などを見れば、亡くなった人たちの姿や焼き尽くされた街の光景がたくさん残されてるわけだけど、今の人たちは、そついったものをおそらく見たくないでしょう。でも、まず知ることから、何かを考えたり動いたりすることが始まると思うんだよ。

中西さんからのメッセージ

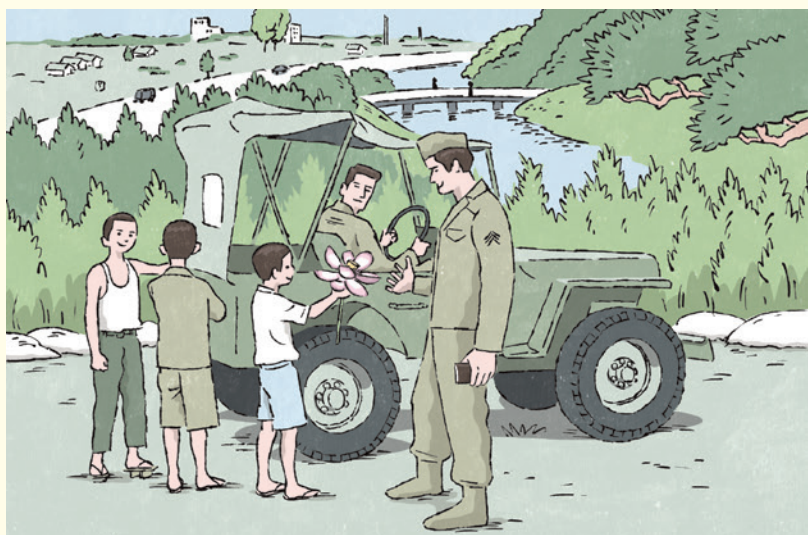
なぜ戦争をするんだろって、考え続けています。6歳で空襲に遭ったけれど、中学・高校に進んでも、その意味はわかりませんでした。安保闘争でデモをする若者の姿を見て、答えが得られたわけじゃないけれど、「誰かの言いなりにだけはない」という決心をしたんです。

今の若者は、自分の意見をはっきり言いませんよね。オブラートに包んでしか言わず、でも、陰ではSNSとかで匿名でコソコソ書く。揉め事を避けたいのか、大人になりすぎたのか、人生が面白くないのかわからないけれど、それでは何も伝わらないし、何も変わらない。「私はこう思う」と胸を張って言う一方、相手の考え方にもすっかり耳を傾けてほしい。それが、戦争のない未来をつくる、ほんとの一歩になるんじゃないかな。

中西さんの物語

Story of My Life

通りかかったジープの米兵に、
泳いで採った蓮の花を差し出し
「ギブ・ミー・10エン!」と声をかけた



米兵が占領軍として日本へやってきたとき、彼らへ片言の英語で話しかけたのは、甘いものに飢えた子どもたちでした。

「赤坂見附から永田町へ向かうには、橋を渡りますけど、その下が弁慶濠で、戦後もない頃は、初夏になると蓮の花が咲いて、それはきれいだったものです。

ある日、友だちと水遊びをしたり釣りをしたりしてたら、どこかの宿舎か施設へ向かう、米軍のジープがやって来るのを見えました。そこで「ギブ・ミー・10エン!」と言いながら、泳いで採ってきた蓮の花を差し出したんです。すると、米兵は車を停めて花を受けとり、10円をくれました。ただお金をもらうよりも、花と引き換えの方がいい、とまで考えたかどうかはわかりません。その10円で何を買ったのかも覚えてません。

家族や財産、家や土地を奪った米兵を、憎む大人はたくさんいました。でも、あの頃の私にそういう意識はなく、いろんなものを持ってきてくれる優しい人、それぐらいの印象しかなかったのでしょう」

川へ向かうか、山へ向かうか 燃えさかる下町を逃げながら それが命の分かれ道となりました

十万人の人々が火に焼かれ水に沈んだ、下町の大空襲。華やかな浅草の街は焼け落ち、母親や隣人家族とともに、焼夷弾が降り注ぐなかを逃げ惑った10歳の少女が、廣瀬房代さんでした。家も暮らしも失って、一週間以上もかけようやく疎開した北海道では、身の回りのものを手放さなければ、生き延びられない日々を送ります。戦後に就職した百貨店では、当時ではめずらしく、結婚後も仕事を続ける道を選んだ廣瀬さん。「おかしいと思っても声を上げられない時代が、確かにあったのよ」と、力を込めて話します。

戦争体験者

廣瀬房代（ひろせ・ふさよ）さん（90歳）



昭和9(1934)年、浅草生まれ。三味線などを教える母と2人暮らしで、小学校に上がる前は日本舞踊を習っていた。6歳の時に太平洋戦争開戦。昭和20(1945)年3月、10歳で東京大空襲を経験した。疎開先の北海道に向かう際の汽車は幾度も機銃掃射を受ける。戦後は家族と千葉県に住み、高校卒業後、銀座松屋に就職。結婚後も子育てをしながら仕事を続け、35歳で退職後は保育や介護の仕事に就いた。手元に残る戦前戦中の資料をもとに、4年間にわたり、自宅で「わが家の戦前戦後展」を開催した。

interview 廣瀬房代さん

撮影場所 ● 港区立郷土歴史館

両親と廣瀬さんの手紙のほか、夫の両親が残した戦時中の資料を寄託している。



鹿又大輔
（かまた・だいすけ）さん

田中陽暖
（たなか・ひなた）さん

亀田知沙
（かめだ・ちさ）さん

齋藤ジェイソン
（さいとう・じえいそん）さん

お隣は家族同然
楽しくにぎやかな下町の暮らしも
だんだん息苦しくなっていました

田中——下町の出身だそうですね。

廣瀬——生まれは浅草です。浅草通りに、菊屋橋という路面電車（市電・都電）の停留所があつて、そのそばに住んでました。松葉小学校がすぐ近くでしたが、勉強しないで遊んでばかり。

家では、三味線や新内（三味線を弾いて人情劇を語る音楽）を教える母と2人暮らし。父とは離れて暮らしていました。母が出稽古（でげいこ）（先方へ出かけて教えること）に行くと、夜の9時くらいに帰ってくるまで、私は一人っきり。夕方、あっちこっちから晩ご飯を作る音が聞こえてくるなか、誰もいない家にいるのは寂しいんですね。

すると、隣の家から「ご飯できたよー」って声がかかってくるんで、私も「はい」と入っていった食べさせてもらい、次は「お

風呂沸いたよー」で、私も「はい」。お隣は5人の子どもがいて、お父さんは出征で大変だったのに、ほんとによくしてくれました。私を入れて6人の子どもと、母親が2人。そんな暮らしでしたね。

齋藤——三味線を習っていたんですか？

廣瀬——3歳のときから、日本舞踊を習ってました。大好きでした。

田中——その頃の浅草はどんな街でしたか？

廣瀬——にぎわっていましたよ。劇場や映画館が並ぶ六区という興行街があつて、ロッパ（古川緑波）やエノケン（榎本健一）といった当時の大スターたちも、そこから出たんです。見せ物小屋では、ろくろっ首のお姉さん、露店では、バナナや七味唐辛子の口上売り（調子の良いセリフを述べたてて商品を売る者、すぐくおもしろかったですね）。

亀田——戦争で、街は変わりましたか？

廣瀬——学校は松葉尋常小学校から松葉国民学校になり、子どもたちも学童ではなく



三社祭の衣装を着た廣瀬さん。
3歳頃



浅草六区の浅草大勝館。昭和16(1941)年にはアメリカ映画の上映が禁止される
(提供：優美レンタル、撮影：師岡宏次)

がみんな、料理を並べた食卓もそのまま、突然いなくなっていました。ひよっとすると、スパイの疑いを持たれて、特高警察（とくこうけいさ）（秘密警察）に連れて行かれてしまったのかも？

浅草通りは一面火の海
下町空襲の夜、2人の母親と6人の
子どもは上野の山をめざしました

亀田——そして、空襲が始まったのですか？

廣瀬——どんどん激しくなりました。夜に空襲警報が鳴ると、お隣の土間に掘った防空壕に入っていました。母2人は、外で見張りです。

爆撃中は目と耳を覆い、口を開けるんですよ。近くに爆弾が落ちたときに、爆風がそういった体の孔（あな）から入ると、内臓が飛び出してしまいます。近くの文房具屋のおじさんは、爆風がお尻から入って滅茶苦茶な亡くなり方をされたようです。

灯火管制で街が真っ暗になり、爆弾を落

コラム 18 ● 千人針（せんになはり）

白い布に赤い糸で1人1個ずつ、合計千の結び目を縫いつけたもの。出征する身近な男性に、すべて女性が作って贈る習俗で、日清・日露戦争の頃から広まりました。この布を身に付けていると、弾除け（弾丸が当たらないようにすること）のお守りになるとされ、戦地の兵士は、腹に巻いたり帽子に付けたりしました。戦時下の街頭で、結び目を作ってくれるよう見知らぬ人にも声をかける、女性たちの姿が多く見られたそうです。寅年生まれの女性はとくに効果があるとされ、年齢の数だけ玉結びを作ることができました。



廣瀬さんの夫の両親が残した千人針。「虎は千里を行って千里を帰る」という言い伝えから、戦地から無事に帰れるようお願いを込めて虎が描かれた。2匹のトラのあいだの文字は「サムハラ」と読む。実際にはない漢字で呪文のようなもの



鹿又——逃げきたらと思ったのは、いつでしょうか？

廣瀬——上野公園の山に着いた時でしょうか。でも、その手前の上野駅には、憲兵が立ちふさがって、駅は敵機の標的になってるから中を通ってはいけない、と言っんですよ。駅を抜ければ、すぐ上野の山に行けるのに、迂回すると時間がかかってしまう。そうして問答してる間にもまわりで人が撃たれてるんです。憲兵に逆らったら殺されてもおかしくない時代だったけど、母は決死の覚悟で「生きるか死ぬか、私たちが決めます！通してください」と叫び、無理に突っ切りました。憲兵は無言で道をあけてくれました。



空襲で焼けた浅草の街。浅草松屋の屋上より(提供:東京大空襲・戦災資料センター)



とす目標が分かりにくくなると、アメリカさんは明るく光り、ぽあぽあとする照明弾で街全体を照らし、焼夷弾を落とすようになりしました。焼夷弾の中には油脂が入っているから、中空でバラバラになって落ちて張り付いて火がつくと、人間だろうと建物だろうとパツと燃えてしまいます。

田中——3月10日の下町空襲、いわゆる東京大空襲の日も、浅草にいたんですか？

廣瀬——隣家の子どもたちと防空壕で寝ていたら、隣のおばさんの「早く出ておいで！逃げるんだよー」という悲鳴のような声が。少しの食糧が入ったリュックを背負って飛び出すと、すでに辺りは火の海でした。家の前の道は炎でふさがれていたで、裏側の竹柵を壊し、火の手のやや薄い道から近くの酒蔵に避難したけれど、すぐに蒸し焼きになってしまいそうです。そこで炎をかいくぐり、当時から道幅の広かった浅草通りまで出ました。母や隣の家族と菊屋橋

に立ち、隅田川の水の方か、上野の山(上野公園)の方か、どっちに逃げたらいいの？すると母が、なぜか「水はだめ」と言っただけです。誰も「どつて？」とは聞かなかったけれど、翌日に通りがかると隅田川は溺死体でいっぱいでしたから、命拾いをしたことになりましたね。

いろいろな物が燃え落ちてくるので、6人の子どもは、2人ずつ手をつなぎ、2人の母親は、危険が迫るたびに子どもたちに覆いかぶさってくれました。町のあちこちに置いてあった防火水槽の水をかぶっては火の粉を避けました。

亀田——逃げているときは、どんな気持ちだったのでしょうか？

廣瀬——そのときは、何も思いません。逃げることで精いっぱい。まわりで次々と人が死んでいくのを見ても、何も感情が湧かないんです。映画のシーンを観ながら走ってるような感じだったかもしれません。

齋藤——その憲兵は、親子を逃がしてあげたかったのでしょうか？

廣瀬——私たち6人の子どもたちに生き延びてほしい、と思ったのかもしれないね。

上野の山には、近所の人みんなで作ったという、広い防空壕がありました。そこへ着いて、ようやく体中の血が動き始めるのを感じました。ああ、生きているんだ、と。

朝焼けの頃に山を降り、知り合いの家で休ませてもらうことにしました。3月の寒い夜に水をかぶって逃げていたので、ほんとに体が冷えきってたのでしょう。一つの炬燵に、家の人と合わせて12人。ぎゅうぎゅうになって入り、なんとか少し眠りました。明るくなってから、生きていることを報告に小学校へ行きました。みんな服は焼け焦げて、目も充血してぼろぼろ。すると、千葉からやって来たという、籠を背負ったおじさんが、子どもたちにおにぎりを配ってくれたんです。水もないのに、おにぎり

をばくばく食べて、ようやく人間に戻った気がしました。どんな人だったかわかりませんが、とてもありがたかったです。

齋藤——たいへんな体験でしたね。

廣瀬——防空壕から出られずに焼け焦げた人や、窒息して亡くなった人もいっぱい。親が亡くなったために、大勢の子どもたちが孤児になってしまいました。家や親をなくした大人たちや子どもたちが、たとえば上野の地下道にはびっしり寝ていましたが、夜が明けると、隣にいた1人2人が死んでいるといったことも当たり前のようになってたようです。今でも、その地下道に行くとき当時の様子を思い出します。

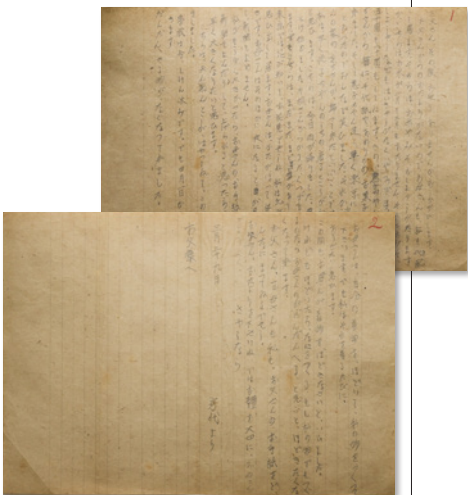
家を失い、北海道へ疎開
母は身の回りのものを売り、食べ物を手に入れながら自分は食べずにいたのかも

亀田——ご自宅も燃えてしまったため、疎開をされたわけですね。

疎開先から父への手紙

(前略) だんだん、きる物が、なくなって来ました。お母さんは、自分の着物を、ほどこいて、私の物をつくって下さいます。でも私はそれを着るたびに、ありがたいと思います。この間も、お母さんが着物を、ほどこなさいといいました。けれどもほどこいたら、なにをつくる、もし私の物でもつくるのならお母さんのがだんだんへる、と思うと、ほどこたくなくなって来ます。お父さん、お母さんも私も、お父さんのお手紙をどんなにまわっているでしょう。お父さん、おたよりを下さいね、ではお體を大切に、お母さんがよろしく、さようなら
三月二十九日
お父様へ

房代より



上芦別から廣瀬さんが送った手紙



茂尻の盆踊り大会



疎開先から戻り暮らした千葉の中郷村(現・木更津市)の家

※漢字は原文のままですが、仮名は新仮名遣いに表記を改めました。

廣瀬——叔父の親戚がいる北海道へ向かったんです。

鹿又——北海道へは、どうやって移動を？

廣瀬——まず汽車で青森に向かうんですが、人がぎっしりで身動きもできません。機銃掃射や警報のたびに、汽車も止まり、青函連絡船(貨物を積んだ鉄道車両や人を乗せて青森と函館を結んだ連絡船)に乗るまで、東京を出て7日くらいかかりました。その船も嵐で大きく揺れて、ごろごろと体が転がったのを覚えています。

亀田——疎開先はどこなところでしたか？

廣瀬——まず茂尻という炭鉱町(石炭を掘る鉱業で成り立つ町)に住みました。北海道には空襲がなかったので、お祭りもあったんですよ。そこで数カ月してから、叔父の別の親戚がいる上芦別へ移りました。

齋藤——食事はちゃんとできましたか？

廣瀬——上芦別の家は元食堂で、食べ物ばかりと手に入りやすかったようです。ニシ

ンやサケ、ウニ、カニ、イカ……と海産物は豊富で、肉もおいしい。ジンギスカンも食べましたよ。ジャガイモ、トウモロコシなど、野菜も豊富。砂糖が足りず、お汁粉は甘いお芋やカボチャで作りました。野山で遊びながら、ノビルやぺんぺん草、沢ガニ、イナゴなど、何でもとって食料にしました。東京では病弱だった私なのに、疎開しているうちにすっかり健康になりました。

齋藤——生活費は、どうしていたのですか？

廣瀬——タケノコ生活ってわかりますか。手持ちの着物などを、1枚ずつ剥いでいくように食べ物と交換していくから、タケノコって呼ぶんですよ。その頃、母と一緒に食事をしました。自分は食べていなかったのかも知れません。やがて、夜は目が見えなくなってしまった(ビタミンA不足により、夜盲症「鳥目」という病気になることがある)んですが、終戦後には治りましたから、きっと栄養が足りなかったのでしょう。

廣瀬さんの物語

Story of My Life

関東で初めてできた駅ビルの百貨店には
日本で初めて屋上の遊園もできました



関東初のターミナルデパート（終点駅と直結したデパート）として、昭和6（1931）年にオープンした〈浅草松屋〉。日本で初めての屋上遊園も作られて、たいへんな人気を集めました。

「スポーツランド」って名前でしたっけ。豆汽車や観覧車といった遊具がいっぱいで、小さな動物園まであるんですよ。足元には隅田川が流れ、東武線が鉄橋を渡るのが見えました。

もちろん休みの日には、私も母親に連れて行ってもらうんです。午前中は屋上で遊んでから、お昼を地下にある大食堂で食べることが、何よりの楽しみでした。

戦後、進駐軍にずっと接収されてた〈銀座松屋〉が返還されて、デパートとしてやり直すために店員を募集した時、高校3年だった私が応募したのも、そんな幼い頃の思い出があったからかもしれませんね。あの時代は、デパートがとにかく輝いてて、子どもにとっても大人にとっても、街のにぎわいの中心だったような気がします」



インフォメーションやエレベーター案内、売り場、管理……とさまざまな部門を経験してきた

**銀座松屋に就職
やりがいのある楽しい仕事を
結婚してからも続けました**

鹿又——戦後すぐ東京へ戻られたんですか。

廣瀬——いったんは戻りましたが、食べるものがあまりになかったんで、父の住む千葉に移りました。そこでも、近くで魚や野草をとって食べてましたね。

亀田——結婚されてからも退職せずに、仕事を続けられたそうですね。

廣瀬——仕事が本当に楽しかったんです。銀座松屋に勤めて、いろんな経験をするのができましたし。退職してからでも、地域で保育や介護の仕事をしてきました。

今は、港区の夫の実家に住んでいます。戦禍にも失われなかったたくさんの写真や手紙などをもとに、平和を考える展示会などもしてきました。私たちが伝えなければ、強く思ってますから。

廣瀬さんからのメッセージ

あの頃、玉碎や餓死が続いていることを軍はわかっていたのに、勝ち続けていると嘘の報道ばかりを流し、私たちは、日本は勝っているのだと思わされていました。憲兵や特高警察による監視は恐ろしいもので、何かがおかしいと思って、声を上げることもできませんでした。身近な人が戦地へ赴く時でさえ、決して「行かないで」「死なないで」などと泣いてはいけませんでした。お国のために頑張るんだと、誰もが演技をしていたのです。

戦争が始まって平穩だった日々から、空襲に逃げ惑う日々まで、わずか数年しかありませんでした。政治と私たちの日常がどうつながっているかを、いつも考え続けることが民主主義だと思います。戦時の記憶を残す人たちの貴重な証言に、どうぞ耳を傾けてもらえればと願います。

もっと数学を勉強したい！ せっかく進学した東京での学びは、 戦争で絶たれたけれど……

幼い頃から、勉強が好きだった森信子さん。数学をしっかり学びたいと願い、栃木の高等女学校から、女性の最高学府だった東京女子高等師範学校（お茶の水女子大学の前身）へと進みます。けれど、戦争が激しくなつて、空襲を受け、授業も中断。クラスごと、赤城山の麓へ動員させられ、農作業へ従事することになります。

戦後は数学教師となりますが、結婚により退職。仕事への思いを抱いたまま、家事や育児に専念する日々が、およそ半世紀にわたり続いたのです。

話に聴き入る学生たちに、「あなたたちはいいわね、好きな勉強をいくらでもできて」と語りかけます。

戦争体験者

森 信子（もり・のぶこ）さん（99歳）



大正14(1925)年、栃木県の鹿沼町（現・鹿沼市）生まれ。鹿沼高等女学校在学中に太平洋戦争の開戦を知る。昭和17(1942)年に、東京女子高等師範学校の理学部数学専攻へ入学。寮生活を始めるが、まもなく父親が目黒区原町へ自宅を移し、信子さんも引越す。空襲の激化で授業もなくなり、群馬県の富士見村（現・前橋市）の農家へ動員され、当地で敗戦を知る。昭和20(1945)年9月に繰り上げ卒業。数学教師となるが、結婚により27歳で退職する。夫の没後、77歳から、留学生の日本語学習を助けたり、ショートホームステイを受け入れたりする活動を行った。

interview

森 信子 さん

撮影場所 ● 港区立郷土歴史館

空襲の被害に遭わなかった、旧公衆衛生院の建物を保存修復して活用している。



田中陽暖（たなか・ひなた）さん

亀田知沙（かめだ・ちさ）さん

小松尚平（こまつ・しょうへい）さん

静かな町で過ごした女学校で
数学のおもしろさに目覚めたんです

亀田——お生まれになった鹿沼は、どんなところでしたか？

森——のんびりした、まあ田舎町でしたね。お祭りの時はにぎわいますが、ふだんは静かな小さな町。田舎の女学生だったんですよ。

亀田——実家は、どんなお仕事でしたか？

森——材木商をしていました。住み込みの小僧さんも2人いて、いろんな人が出入りする、とにかくにぎやかな家でした。戦争が始まってからは、寂しくなりましたけど。私は、女ばかり5人姉妹の長女でした。母はいつも忙しく、あまりかまってもらえませんでしたから、私も忙しくしていました。妹たちとよくケンカして、父に土蔵へ閉じ込められたものです。すると、妹は出してくれと泣くでしょう？ 私は「音がしなければ、きっと心配して開けるから、泣かな



白いご飯を食べたいと思っていました。海の魚は手に入りにくいので、川を木で囲ってウナギを飼っていました。もちろん食べるためです。

亀田——日中戦争で生活は変わりましたか？

森——父に召集令状が来ました。当時、37歳でした。宇都宮へ4、5人がまとまって出征するのを、駅へ見送りに行ったのですが、悲しかったことを覚えています。

——というのも、その朝のお味噌汁の豆腐が、さいの目に切ってあったから……私の地方では、豆腐のさいの目は、お葬式の時の特別な切り方だったんですよ。ああ、これは戦死してしまっただ、と。

小松——お父さんは戦地に？

森——幸い、内地勤務でした。宇都宮で、輜重兵として戦地に物資を送る仕事だったんです。

亀田——そして、鹿沼高等女学校に進まれたのですよね。どんな毎日でしたか？

森——入った頃は、まだふつうの生活でしたよ。1クラス50人で1学年2クラス。4学年まであり、私は弓道部でした。

田中——私も今、弓道部です！

森——まあ、そうですね。弓道はなかなか難しいですよえ。

学校では、2年生から数学を教えてくださいました。先生のおかげで、数学を好きになったんです。その先生は途中で転勤になったんですが、このままあなたを教えられなくなるのはつらいからと、その後も郵便のやり取りで教えていただいたんです。その指導がなかったら、とても女高師（東京女子高等師範学校、お茶の水女子大学の前身）への合格はなかったと思います。

念願の学生生活も、空襲で授業は中止
クラスごと、農村へ
動員されてしまいました

田中——東京女子高等師範学校を目指された

いで」と諭して。静かにしていると、父がやっぱり心配して戸を開けてくれました。

田中——友だちとは遊んでいましたか？

森——校庭で遊んでいましたが、遊具などありませんから、いろいろ工夫して。家の材木置き場でも、よく遊びました。夜遅くまで灯りをつけていると、親がうるさいので、材木置き場に懐中電灯を持っていった勉強もしました。

新聞を読むのも好きでしたね。小学5年の時は、女性が司法試験を受けられると新聞で読んで、うれしくて、母に「私、勉強して弁護士になる！」と言った記憶があります。

小松——すごい！本気で目指すおつもりで？

森——そう、うれしかったから（笑）。新聞では日中開戦も知りました。

田中——ふだんは、どんな食生活でしたか？

森——麦飯ですが、戦争が激しくなると、麦がどんどん多くなったので、いつか真っ

コラム 19 ● 宇都宮の輜重兵（しちょうへい）

旧陸軍において、人員、兵器、食糧などの調達や補給、輸送など、戦闘の後方支援を担ったのが輜重兵。このような業務を兵站と呼び、戦争においてたいへん重要な役割を果たしたのです。師団（1万5千人～2万人ほどで構成される陸軍の組織）の一つが置かれ、陸軍の拠点であった宇都宮にも、輜重兵連隊がありました。関連する軍需工場や施設なども多く、軍都と呼ばれていた宇都宮は、何度も米軍の標的とされ、とくに昭和20（1945）年7月12日の空襲では大きな被害を受けました。



輜重兵第14連隊（提供：随想舎、石井敏夫絵葉書コレクションより）

のは、なぜでしょう？

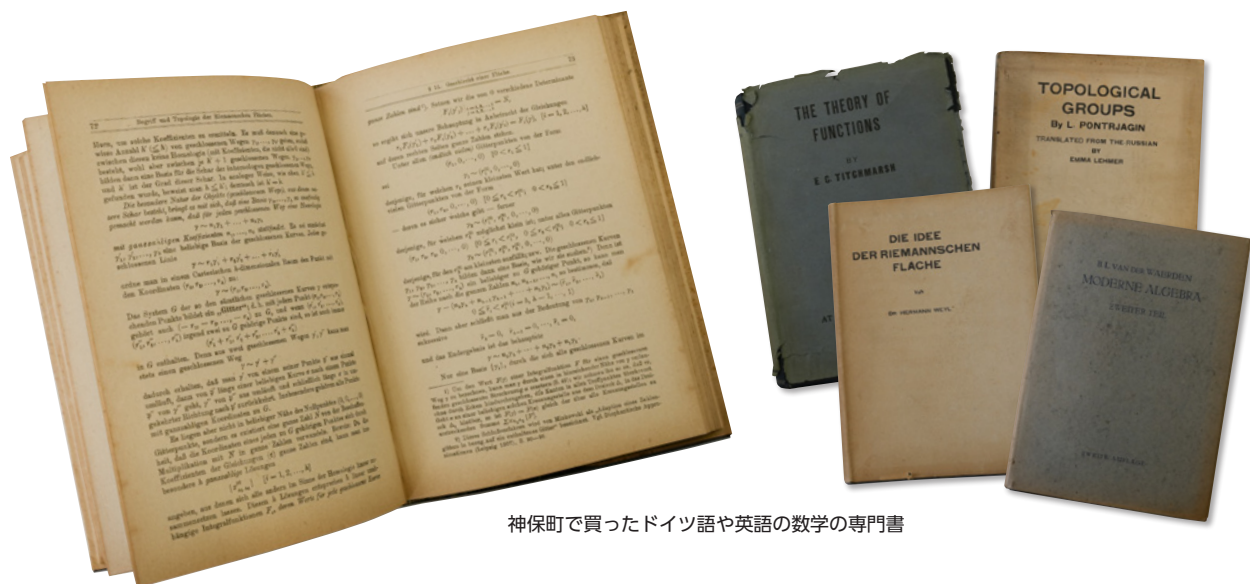
森——当時、女性が入れるいちばん難しい学校だったからです。どうしても東京の学校で、もっと数学を勉強したかったの。受験の時は、お友だちが駅まで見送りに来て「頑張っておいでー」って。でも、もちろん私は不安でいっぱいでした。

だから合格した時はうれしかったですねえ。女高師に現役合格したのは、開校以来初めてだったそうで、教頭先生が朝礼で「このたび前澤（旧姓）信子さんが合格しました」と皆に発表してくださいました。

亀田——1人で東京に来られたのですか？

森——最初は学校の寮でした。8人部屋だったかしら。中央に机があって、その左右に4人ずつ分かれて寝ていましたね。

ただ消灯が早いので、宿題が終わらない時は、電灯のついているトイレで勉強するんです。当時は和式だから、立ったままですよ。



神保町で買ったドイツ語や英語の数学の専門書

田中——授業はそんなに難しかったですか？

森——難しかったですねえ。英語はとくにできなかったかも。3年生からのドイツ語は一生懸命やるつもりだったのに、戦争が激しくなつてあまりできませんでした。今も覚えているのは、「イッヒ デンケ アルゾー ビン イッヒ」(Ich denke also bin ich: 我思う、故に我あり)というデカルトの言葉です。

女高師に入ってから買った本では、キューリー夫人の伝記も大切にしています。

小松——「真理の白光を求めよ、知られざる新しき道を求めよ」に線が引いてありますね。

森——キューリー夫人は憧れでしたから。あの頃、大切に思っていた言葉です。

田中——けれど、戦局がどんどん厳しくなってきたわけですね。

森——空襲も始まり、学生寮の隣にあった、傷痍軍人（戦争で傷を負った軍人）の療養所も狙われて、その火がこちらの学生寮へ

も燃え移ったんです。火の粉を払おうとした同級生は大怪我をし、ほかの学生たちも焼け出されてしまいました。

田中——森さんも被害に遭われたのですか？

森——私はその頃、目黒区原町の実家に住んでいたのです。ただ目黒も空襲を受けましたから、遠くまで避難を繰り返し、父と自由が丘のあたりまで逃げたこともあります。

ようやく爆撃機が去っていき、家の方に戻ろうとしたら、父に「家はもうないだろうから、お前は鹿沼に帰れ」と言われました。けれどその頃は、東京を離れたら学校は退学となる決まりでした。東京にいて空襲で死ぬのは嫌と郷里へ帰った同級生が、退学になりました。結局、目黒の家は焼けずに残っていたので、私は退学にならずにすみました。

亀田——そんなたいへんな状況を、学生はどんな服で過ごしていたんですか？



森さんの写真。昭和16(1941)年11月頃



東京女子高等師範学校1年生の森さん(写真左)。昭和17(1942)年4月

森——もんぺをはいてゲートルを巻き、防空頭巾をかぶり、名札を付けていました。

●●学校●年とか、名前や血液型も書いておくんです。どこで負傷したり死んだりしても、身元がわかるように。

小松——授業は行われていたのですか？

森——戦争が激しくなつて、授業も満足にできなくなりました。2年生の終わる頃、先生が、「本も手に入りになくなってきたから、今のうちに3年で使いそうな本を買っておくように」と言われ、友だちと神保町へ数学の専門書買いに行きました。結局、使うことはなかったんですけど、それが今も大切にしている数冊です。

小松——でも、ドイツ語はともかく、英語は敵性語（敵国の言語）だったのでは？

森——そう、英語を大きい声で読むと、外に聞こえたらどうすると叱られたんですよ。ついには、英語の授業はなくなりましたね。3年からは勤労動員に行かされ、勉強もほ



勤労働員や学童疎開で一家離散し、再会できない可能性を考えて撮った家族写真



親戚の青年の出征時の写真

とんどできなくなりました。

田中——どこに動員されたんですか？

森——クラス全員がまずは陸軍の兵器補給廠に動員され、戦地に食糧や兵器を送る仕事をしました。兵隊さんが威張っていて、何かというと怒るの。兵隊さんとすれ違っ

時は立ち止まって「頭、右（頭を相手の右方へ向ける敬礼の仕方）」が決まり。きちんとやらないと怒られました。

次は群馬県の赤城山の麓にある、富士見村（現・前橋市）への農村動員でした。農家一軒に2人ずつ泊まり込んで、農作業の手

コラム 20 ● 農村への学徒勤労働員（がくときんろうどういん）

戦争が激しくなると、それまで生産労働を支えていた人々が兵役に取られて、工場や農村の労働力が不足するようになります。それを補うために、学生や生徒（学徒）が強制的に労働に従事させられたのが、学徒勤労働員です。日中戦争が広がる昭和13（1938）年6月に、年間3～5日の勤労奉仕が中学以上の生徒に義務づけられたことから始まり、太平洋戦争が激化する昭和19（1944）年3月には、通年での実施が定められました。そして、昭和20（1945）年には、すべての学校で授業が停止され、全国の学生・生徒が総動員されることになります。軍需産業の工場だけでなく、食糧増産のための農村への動員も行われ、穀物や野菜を作る農作業に従事させられたのです。



くわを持ち畑を耕す女子生徒（提供：共同通信社）

伝い。田植えの時など、同級生はミミズや虫を怖がってなかなか田んぼに入れないんですが、私は田舎育ちだから平気。率先して作業し、けっこう得意になっていましたよ（笑）。滞在先が農家だから食べ物にもさほど困りませんでしたね。

教師の仕事も、結婚でおしまい
もって教師や数学の勉強を
続けたかったですね

田中——玉音放送は、どう？

森——おそらく農家にいた時、誰かに知らされたのでしょう。滞在先の農家にも、ラジオはなかった気がします。

田中——降伏を知った時は、どう思われた？

森——負けたのは悔しいけれど、これでもう爆弾は落ちてこない。そんな気持ちでした。

亀田——そのあとは、学校に戻られた？

森——8月に戦争が終わったら、9月

には繰り上げ卒業。もう勉強はできませんでしたが、卒業できたことはうれしかったですね。

すぐに、高崎高等女学校の数学教師として配属されたのですが、半年だけでした。あまりにも食糧事情が悪かったからです。そして、再び東京に戻ってからは、学制改革もあり化学、理科なども教えていましたが、やはり好きな数学に絞りたいくて、東京女子館高等学校の数学教師になりました。

東京でも配給は乏しく、食べ物にはずいぶん苦労しましたが、教師でしたからヤミ物資には手を出さずに耐えました。

小松——ようやく夢を叶えられたわけですね。

森——さて、どうでしょう。本当は、大学に入り直してもっと数学を勉強したかったですよ。戦後は、東京大学も共学になったので、私も挑戦して数学を勉強したかったけれど、親から、もう学費を出すのは難

しいと言われ、諦めました。

亀田——教師の仕事は、いつ頃まで？

森——27歳で結婚するまで。友人の紹介で結婚した夫が、検事という転勤の多い仕事に就いたこともありましたが、その頃は、専業主婦が当たり前とされていたのです。

亀田——どんな方でしたか？

森——ハンサムだったんじゃないかしら。人柄も良かったですよ。お見合いした時は、戦争から帰ったばかりで「僕はリュックサックひとつしかないけれど本当にいいのか」と、小さな声で何度も言うので、「私はモノと結婚するんじゃないくて、あなたと結婚するんです」と答えたんですが、そしたら、たとえばではなくて本当に、荷物はリュックサック1個だけだったんですよ（笑）。

学徒出陣でインドネシアに行っていた夫は、夜、うなり声を上げることがよくありました。「どうしたの」と聞くと、「戦争の夢を見ていた」と。つらい経験も多かった

のでしょ。

田中——復職はされなかったのですか？

森——女学校時代の恩師(教頭先生)が「横浜の学校で週3時間ほど、数学を教えてくださいませんか」と、私に声をかけてくださったものの、夫は賛成してくれず、断念したことがありますが、やってみたかったですね。

アジア学生文化協会のボランティアとして、留学生の日本語教育を助けたり、短期留学生の世話や、ショートホームステイの受け入れをしたりしてきました。若い人たちと話すことがとにかく好きで、彼らには「留学して日本に友だちができれば、そこへ爆弾を落とすなんてできないでしょ。それが留学することの、大きな意義だと思いますよ」と伝えてきたんですよ。

森さんからのメッセージ

私が今、こうしてお話をできているのは、運が良かったからだと思います。空襲でお母さんが亡くなり、本人も顔や手に大やけどを負って、手袋をしたまま高校の教壇に定年まで立ち続けた人もいます。長崎出身で、原爆で両親を亡くしたり、沖縄に教員として赴任し、ひめゆり部隊の生徒と一緒に亡くなったり。そんな同窓生がたくさんいましたし、夫も戦時の夢に苦しめられ続けていました。

今も世界では、戦争に苦しんでいる人たちが大勢います。とても心配で、いろんな方にウクライナ国旗の色の紙でこまを折って手渡したりしています。

今の平和な日本で、好きな勉強を好きなだけできる幸せを、ぜひとも感じてください。そして、世界平和の実現に貢献できる人間になつてほしい。

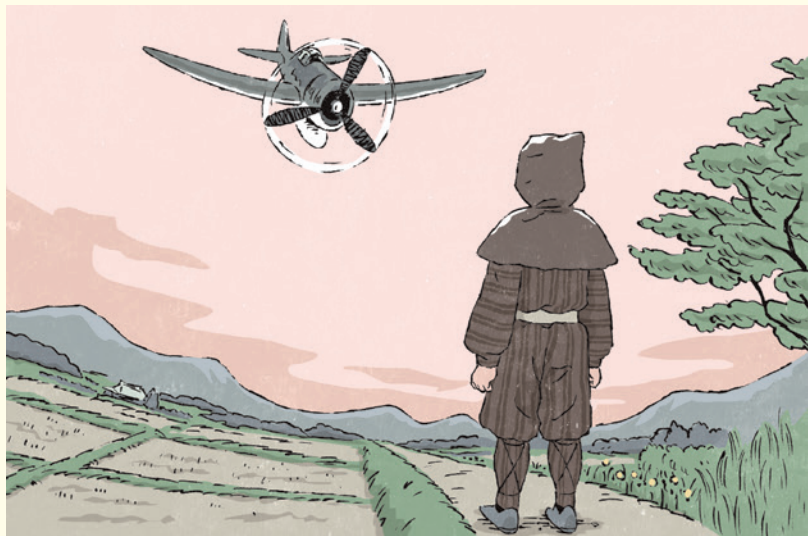


アジア学生文化協会日本語学校 教室での写真

森さんの物語

Story of My Life

たった1人で敵機と向き合った、あのとき
なぜ彼は、そのまま飛び去ったのでしょう



戦況の悪化をひしひしと感じながら、森さんは「私も死ぬんだ」と何度も思ったそうです。「たまたま鹿沼へ戻り、広い農地を一人で歩いていたのです。突然、敵の飛行機が何機かきて、そのうちの1機が、私のそばを旋回し始めました。身を隠すところもなく、どれだけ走ってもとても逃げきれません。

もう日本は終わるのだ、私もやられるならそれでもいい……逃げるのをやめ、私はまっすぐ敵機に向き合ったのです。するとその機は、そのまま飛び去っていきました。なぜそうしたのか。ひよつとしたら、ゲートル巻きで防空頭巾で逃げる後ろ姿が、パイロットには男と見えていたのかも。私が正面を向いたことで、実は女だとわかり見逃すことにしたのでしょうか。

もしそうなら、私は女だったから助かったことになりましたね。長く生きてきた中で、女であるために何度も悔しい思いをさせられてきたのに、命の瀬戸際でそんなことが起きていたとは、なんて皮肉なことでしょう」

インタビューを終えて

戦争を体験した方々のお話を直接伺って、
学生たちはどんな感想を持ったのでしょうか。
一人ひとりの学生に、インタビューを終えて感じたこと、考えたこと、
また「戦争」をどう受け止めたかを聞いてみました。



平和を守り受け継いでいく
責任を痛感しました

上野七海さん……うののなみ P.70 Photo



戦争体験者の方へのインタビューを通して、命の重みや日々の当たり前の尊さについて深く考えさせられました。
戦争の現実には私たちが何気なく過ごしている平穏な暮らしとは全く異なるものであり、「平和であることがどれだけ大切なか」という言葉には、戦争を生き抜いた方だからこそ説得力があり、私の心に強く響きました。

さらに、お話の中でも「本物を見極める力を持ちなさい」と言われたことが印象的でした。現代は情報が溢れている時代です。一部だけを見て判断するのではなく、全体を俯瞰し、多角的に物事を考える大切さを教えていただきました。

また、これからの世代がその平和を守り、受け継いでいく責任があることを痛感しました。

ただ受動的に平和を享受するのではなく、過去の教訓を学び、自分たちの行動に責任を持つことの重要性を強く感じます。

このインタビューを通じて得た学びを、これからの生活や考え方に活かしていきたいと思いました。
そして、戦争の記憶や平和の大切さを他の人にも伝えていけるよう努めたいと思います。

一言二言に戦争の悲惨さが窺えて
胸が張り裂ける思い

大橋樹亜良さん……おおはしきみ P.80 Photo



今回のインタビューで、戦争体験者の方のお話を直接聞くことの大切さをより深く感じました。SNSが発達した時代に、映像ではなく直接お話を伺えたことは何より貴重な経験となりました。
お話を伺った可児さん、泉さん、お二人の戦争のご経験は同じ「戦争」と言っても全く違うものであり、時に胸が張り裂けるような戦時中のお話、また、戦前や戦後にご家族と過ごされた時のお話を伺うことができました。
お二人が特におっしゃっていたことは、政治、国同士の争いに、全く関係のない一般市民がどれほど被害を受けたかということです。空襲の火の手が迫る中で、最後の別れとなってしまった家族の姿。そして、会いたけれど遺体となった姿は見たくなかった、とおっしゃる一言一言に戦争の悲惨さを窺い知りました。

私が19年間過ごしてきた港区で、実際に起きたとは信じられないようなお話でしたが、このお話を伺い、多くの人が悲しむ戦争というものを起こさないようにするために、伝え、行動しなければならぬと改めて感じました。港区平和青年団に続き、このような平和事業に参加させていただきましたこと、そしてこのインタビューに関わってくださったすべての方に感謝申し上げます。

肉声で紡がれた言葉は
若い世代の感情を動かします

笠畑里紗さん……かさはり P.90 Photo

インタビューを終えて、私は肉声で発せられる言葉の肝要性を、改めて強く実感することとなりました。インタビューをさせていただいたお二人とも、身振り手振りを用的ながら、当時の細かな色や景色などを教えてくださいました。それが、聞き手側の私たちにとってイメージを膨らませながらインタビューをするための材料になり、濃く有意義なインタビューになったように感じます。また、話し手の方の声色や話すスピード、抑揚などによっても印象やイメージが具体的に感じた場面もありました。もちろん、文章につづられた経験を読んで学ぶことにも大きな意義があると思います。けれど、私は今回の経験を通して、その時実際に生きたその場所にご自身の足で立っていた方々の声でその経験を聞くことは、平和で何事もない日常に慣れきっているこれからを担う若い世代にとって、新たな感覚や感情を呼び覚ます重要な経験になるのではないかと考えました。また、戦争を体験された世代で、ご自身の経験を伝えられる方が年々減ってきているという状況において、これからの時代を生きていく若い世代である私たちが、その言葉を紡ぎ伝承する必要性が迫っていると感じました。

今後も、私自身がさまざまな

人を訪ね、対話を通して紡

がれた言葉を、次の世代

へパトナタッチできるよ

うな存在になっていきたく



人生を前向きに生きる姿勢の
大切さを学びました

片山萌花さん……かたまもか P.100 Photo



今回のインタビューを通じて、戦争体験者の方から直接お話を伺う機会は非常に貴重な体験となりました。私自身、海軍船舶特攻隊の曾祖父を持つ関係で、戦争体験についてインタビューした経験があり、小学生ながらもその記憶は鮮明に残っています。これまでは教科書で学ぶような兵士として戦場に行かれた方々のお話を聞く機会が多かったですが、今回お話を伺った可児さんは、少し異なる視点から戦争を語ってくださいました。

100歳を超えてもなお元気で創作活動を続けられている可児さんのお話は、私にとって新鮮で、非常に興味深いものでした。特に、食糧難の時代にもかかわらず、夜食にコッペパンが配られたことや、戦後の厳しい時期にも意外と物資があったという話は、これまでの戦争体験談とは異なり、新しい視点を与えてくれました。こうしたお話を通じて、戦争体験は一人ひとり異なるものであり、その背景や環境によって大きく異なることを改めて実感しました。

さらに、可児さんが今でも特許を取得されるようなアイデアや作品を生み出しているというお話には、深い感銘を受けました。その挑戦を続ける姿勢に触れ、自分も何かにチャレンジし続けたいという思いが強くなりました。今回のインタビューを通じて、戦争体験者の記憶を共有するだけでなく、人生を前向きに生きる姿勢の大切さを学ぶことができました。

体験者の思いを聞くことが
自分たちの生き方を考える機会に

金光美早紀さん……みつみ P.70 Photo

私は戦争時の歴史について教科書で学んだり、受験勉強で知ったりした内容しか持ち合わせておりませんでした。しかし、今回インタビューをしたことで、自分の知識が歴史の一部ではないことがよくわかりました。そして、私自身に身近な地域での内容であったため、インタビューで聞いた内容が頭の中に入り込みやすく、終わった後に自分の新しい知識にできたと思いました。

体験者にお話いただいた桜田小学校について一切知識がなく、戦争の知識もあまりない状態でインタビューに臨むことになり、終わった今でも後悔しています。インタビューを終えてから新しく身につけた知識を自分のものにするためにインターネットで調べてみました。すると、戦争の歴史を学んでいる人のほとんどが知っている小学校であったことを知り、どれだけ貴重な内容をインタビューできたのかを理解しました。当時の状況を体験者からの意見や感情、思いについて聞くことで現代を生きている自分たちはどうしたいのかを考える機会になったと思いました。

インタビューの最後に若者への言葉を聞き、私自身ができる事、やるべき事についてよく

り考えなければいけないと感じ、

自分の考えを持ちながら行

動できるように心がけよう

うと思いました。



世界中で今も起こる戦争の 現実を忘れないようにしたい

鹿又大輔さん……かめただいすけ P.90 P.160

今回は2人の方に聞き取りを行いました。聞き取りを通じて、戦争の悲惨さや平和の大切さを深く痛感しました。何よりも、我々の生活は恵まれているということを改めて認識しました。

体験談では、死が迫る状況下でありながら乗車した疎開先への電車での苦難、疎開先で知恵を振り絞った共同生活、他にもあん摩マッサージの話など、懸命に当時を生きようとした生身の声を聴くことができました。特に、戦争が激化するまでは、何も変わらない日常であったという話に意外さと怖さを感じました。こうした、普段の日常が戦争によって急速に変化したという言葉の重みを目の当たりにして感じたことがあります。それは、世界中でも現在も戦争や紛争が起こっているということです。現在も多くの人々が居場所を失い、懸命に生活しているという現実に関しても決して忘れてはいけないのだと実感しました。だからこそ、貴重な戦争体験談を後世に継承していくことで、少しでも多くの方が問題意識を抱くことができるのではないかと考えます。

今回の機会をもとに、今後さまざまな方々に聞き取りをして発信し、戦争を知らない世代として体験者の声や熱意を適切に継承していきたいです。



戦争の恐ろしさや悲惨さが 心に響きました

亀田知沙さん……かめただいすけ P.160 P.170

森信子さんと廣瀬房代さんから

お話を伺うことができ、非常に貴重な時間を過ごすことができました。戦争を実際に体験された方々の声を直接聞くことができる機会は、ますます少なくなっていくため、この時間はとても有意義な時間となりました。戦争体験は一人ひとり異なり、それぞれの感想や思いがあることを実感しました。



インタビューを通じて、戦争の恐ろしさや悲惨さが心に響きました。特に、戦争中、郊外へ逃げる際に学校を退学しなければならなかったことや、男女の資金差、地域による物資の余裕の違いなど、さまざまな現実があることを知りました。また、当時の数学の授業で使っていた教材や本、写真などの実物を見せていただき、具体的なイメージを持つこと、教科書では学べない生の情報を得ることができました。

初めてのインタビューで緊張しましたが、同じグループの仲間にも助けられながら、無事に終えることができました。本当に良かったです。この貴重な体験を通じて、歴史を学ぶ大切さを再認識しました。ありがとうございました。

人の声や表情に宿る重みを 改めて実感しました

小松尚平さん……かめただいすけ P.170 P.180

港区在住の戦争体験者の方へのインタビューを進めている最中、父は他界しました。父も戦争体験者で、昨年85歳を迎え、生前、父からは戦争の話詳しくは聞けないまま、その時を逃してしまいました。

今回のインタビューで、戦争体験者の方は淡々とした口調で当時の状況を語ってくださいました。街が消え去り、大切な人々を失った悲しみ。そして、戦後を必死に生き抜いてこられた体験を、静かな声で、しかし確かな意志を持って語ってくださいました。

私は現在、戦災VRの制作に携わっています。デジタルアーカイブによる空間保存と、バーチャルリアリティ技術を活用する試み。しかし、今回のインタビューを通じて、デジタル技術だけでは伝えきれない、人の声や表情に宿る重みを改めて実感しました。

インタビューの中で特に印象的だったのは、「今が平和ということを感じてほしい」という言葉でした。父と同じ時代を生きた方から聞いたこの言葉に、戦争を経験した世代の切実な願いを感じました。



「次世代に伝えたい」という思いを 受け止めてつなげていきたい

古山智恵さん……かめただいすけ P.180 P.190

今回のインタビューを通じて、

港区平和青年団の活動を体験したからこそ、戦争体験者の方々のお話を一層深く実感することができました。壮絶な戦時中の体験や、日常が一瞬で奪われる現実に向き合いながらも、今こうして未来のために平和の大切さを伝えてくださる姿に感動しました。そのお話には「次の世代へ伝えたい」という強い願いが込められており、その思いを私たちがしっかりと受け止め、つなげていくことが大切だと感じました。



これまでも平和青年団を通じて平和について考える機会はありませんでしたが、今回は港区という地域ならではの体験談を聞くことで、平和の尊さをさらに身近に感じることもできました。地域への戦争の影響について、さらにそれを乗り越えてきた人々がどのように希望を見つけてきたのかを学ぶことができたのは、とても貴重な経験でした。

この経験をもとに、私だからこそできる形で平和に貢献したいと思います。話を聞いただけで終わるのではなく、そこで得た学びを行動に移し、次世代へ伝える責任を果たしていきたいと考えています。

戦争体験者の生の声を聞ける 「最後の世代」としての責任

小林洋太さん……かめただいすけ P.190

戦争体験者の方へのインタビューをさせていただいて、「戦争」というものをより生の状態で感じることができました。教科書ではあまり語られることのない戦時中の生活の様子。以前にも戦争体験者の方々の話を聞いたことがあり、今回のインタビューでその生活というのは体験者の方のバックグラウンドによって全く違うもので、その人その人の起伏に富んだ物語に目を向けることでより私たちの体験していない「戦争」というものの核を知ることができたと思います。80年前が舞台ではありますが、現代を生きる我々の生きる舞台と決ってかけ離れたものではなく、むしろ世界で紛争がやまない今こそ、その記憶と向き合い、解決の方法を模索していくべきではないかと思いました。

今回のインタビューは戦後80年、港区平和宣言40周年ということで行われたのですが、今から10年後にはおそらく戦争体験者の方からお話を聞くことはとても難しいと思います。つまり、今が直接体験者の方からお話を聞ける最後の時期であり、世代ということなのです。

そして10年後、いや、もうすでにこの記憶を語り続けるのは私たちが最後の世代です。このように直接お話を聞く機会がない方にも、お話を聞くことをできた我々が伝えていく「記憶のバトン」が必要です。そのためにまずは我々からこの輪を広げていきたいと思っています。

インタビューにご協力くださった高橋さん、このような機会をくださった皆さま、本当にありがとうございました。



直接体験した人の話は どんな資料より理解が深まります

齋藤ジェイソンさん……かめただいすけ P.190 P.200

今まで、私はインタビューの経験がなかったため、実際にインタビューする際、どのようなことを話せばいいか、また、戦争体験者の方のリアクションにどのように返せばいいのかなどで頭がいっぱいで、当日は、思いっきり気を引き締めていこうと思っていました。しかし、実際にインタビューをすると、どの方も明るく優しく、そして詳しく質問に答えてくださいました。また、積極的にいろいろなお話を聞かせてくれたので、当時の状況への理解が良くなりました。戦争については学校や講習会などでよく教わっていましたが、あくまでも当時の全体像についてがほとんどでした。しかし、今回のインタビューは、戦争を経験した方が自分たちの状況や思い出をそのまま教えてくださったので、非常にリアルな印象が感じられる内容で、新しく知ったこともとても多かったです。

直接体験した人の話は、どんな文献や資料よりも、当時の状況を深く理解できるのではないかと思います。そのため、今回のインタビューで伺った話を、また後世に伝えていくことが平和な世の中を築き上げる上で非常に大切なことだと思います。





想像でしか分からなかったことが 経験談によって心に響きました

佐藤碧さん……ちほひあおひめ P.100

私は港区平和都市宣言40周年事業実行委員として活動する中で、さまざまな経験を味わうことができてとても学びの多い時間でした。

このような機会を提供してくださって、感謝の気持ちでいっぱいです。

インタビューでは、90歳以上の方とお話しすることが日常生活ではなかったため、質問の仕方や話の聞き方をいつも以上に注意するようにしました。当日は初めて会う方に囲まれて、たくさんの方のカメラを向けられ、とても緊張していましたが、周りの方が温かくサポートしてくれて無事終えることができてうれしかったです。私が担当した高橋さんは、とても元気な方でとてもたくさんの方とお話してくださっていました。

空襲がどんな感じだったか、日本全体の雰囲気、戦争が終わった時の気持ちなど、今まで想像でしかわからなかった部分が実際に経験した方の話を聞けて、心がきゅっとなりました。

教科書やテレビでしかみたことのない「戦争」。わかっていると思っても経験談を聞くことで、インタビューをする前よりも格段に気持ちの面での理解が深まった気がします。

将来は国際的な問題に向き合う仕事がしたいと思っていますので、今回学んだことを活かしていきたいです。



たくさんの方々の犠牲の上に 今の平和があると感じました

田中陽暖さん……たなかひなた P.80 P.100 P.110

今、私が毎日当たり前のようにご飯を食べて、勉強して、家族と過ごす時間は戦争中の人にとっては一番過ごしたかった時間だとインタビューをしていてすごく感じました。インタビューした方々は、体験した辛い過去を語ることで、平和な世の中にするための努力をしています。インタビュー中に私たちは、平和な世の中にするため何ができるのだろうかと考えました。

私は、ヨルダンに行って難民の方などの話を伺いました。彼は、元々普通の生活をしていたが戦争が始まったので逃げてきたそうです。でも、彼は必死に今生きています。彼らの話を聞くと今の日本は、たくさんの方々の犠牲により今平和なのだと感じました。

高校生の自分ができることは、戦争を繰り返さないため語り継ぐことだと感じました。また、勉強をしたかったという話が多く、やはり勉強する余裕もないぐらいに忙しい環境なのだと感じたので、自分はいくら勉強しようと思ったのかと決めました。

環境によって戦争体験が 異なるという発見

清水亜桜さん……しみずあお P.100

私はインタビューをしてみて、自分の今までの戦争に対するイメージとのギャップに驚きました。

特に印象深かったことが、戦争がもたらす不平等などや格差についてです。

私が今まで捉えていたように食事に困ったり、戦地に出向かなければいけない人だけではなく、家柄や環境により戦争体験が異なる方がいたということに驚きました。

このことは、私たちが今後も平和を維持していくためには必要な発見だったと感じました。

また、造兵廠などで培った経験をもとに戦後は発明をしているというお話を伺えたことから、技術や知識は戦争の道具として使われるのではなく、人々の生活を豊かにしていくために使っていくべきだと再認識することができました。

今まで、戦争体験者の実際のお話を聞く機会は全くなく、自分の想像や、学校などで学んだり、インターネットなどで見たことしかわかっていなかったのですが、実体験のお話を聞くことで、経験した人にしかわからない感覚や、記憶があるということに強く感じました。

また、戦争や平和について、まだまだ自分が未知であることを実感し、より詳しく知りたいと思いました。たくさん学ぶことで、今後も平和をつないでいきたいと感じました。



毎日食事が普通に食べられる ありがたさを実感

辻孝太郎さん……つじこうたろう P.100

河村さんへのインタビューを終えて、さまざまな事を得ることができました。

私はインタビューの中で河村さんがおっしゃっていた「平和の大切さ」についてのお話が印象に残りました。

河村さんは戦後の混乱期にさまざまなつらい出来事があったとおっしゃっていましたが、その中でも友人が乾燥麺を一緒に食べてしまいたくなられた話が特に印象に残りました。

当時の乾燥麺は乾燥させた藻類でできており、河村さんのご友人はふやかさずにそのまま食べてしまいたくなられたそうでした。当時は食糧が不足しており、満足に食事ができなかったそうです。河村さんはこの様な経験から好き嫌いななく何でも美味しく食べられるとおっしゃっていました。改めて毎食食べられるありがたさを感じました。

インタビュー中、河村さんは時折涙を流しながら辛い戦争についてのお話をしてくださっていました。

河村さんが若者へのメッセージとして何度もおっしゃっていた「平和の大切さ」を胸にこれからもなんらかの形で平和に向けて活動できればと思います。



平和が続く現代の日本だからこそ 記憶の風化を防ぐべき

藤田睦月さん……ふじたむつき P.70 P.100

学校では歴史上の出来事の大半を、出来事そのものについてのみ紹介します。しかし出来事そのものだけではなく、当時現地にいた人の想いや行末、そしてそれら全てに至るまで、僕たちは知る必要があると思います。

「兵隊さんは死んだら軍神、生きていたら臆病者と不条理に言われていた」「教科書のような玉音放送を聞いて泣いていた人、騒いでいた人はいなかった」これらはあくまで一例ですが、それぞれ戦争体験者の方々が実際にあったと言葉です。

無論、日本全国でこのような様子だったのではと断言したいわけではありません。ただ一人ひとりに全く違う人生があり、当然、書籍やインターネットに掲載されている情報は多数ある中の情報の一つに過ぎないのです。僕はこのような「情報の一つ」を、戦争を体験された方から直接伺うことができました。断片的ではなく、その方の人生を追体験できるような話をこの耳で聞くことができました。

「情報リテラシー」の重要性が叫ばれている現代だからこそ、平和な時代が続いている現代の日本にいたからこそ、貴重な情報を伝え、記憶の風化を防ぐべきではないでしょうか。



実際に体験した人しか分からない 悲しさや悲惨さが伝わりました

船本知愛さん……ふなもとあいちな P140

今回インタビューを終えて、改めて戦争の苦労や悲惨さを知ることができました。

私がインタビューをした中嶋さんは、幼少期の経験談でしたが詳細に出来事を話してくださり、とても印象に残りました。特に家族と離れて子どもだけでも安全な場所へ逃げていたことや、帰ってきてからの地元の变化など、実際に体験した人だからこそ語れる、悲しさや悲惨さを実感しました。

プロのインタビュアーやアナウンサーが質問する様子はテレビなどでよく拝見しますが、高校生や大学生といった若い世代が戦争経験者にインタビューするというのはあまりないことであり、これから先もこのような機会は減少していくと考え貴重な体験ができたと思っています。私たちのような学生が実際に経験した体験談をこれから先の世代に継いでいくというのは大事であり決して忘れてはいけないことであるため、語り継いでいきたいと感じました。

今回インタビューをさせて頂いた中嶋さんには感謝の気持ちをもう一度お伝えしたいです。



「記録」だけでは学べない 「記憶」こそが未来への財産

山崎詩歩さん……やまざきしほ P140 P141 P142 P143

記録と記憶には大きな違いがあります。記録は起きた事実を羅列するだけですが、記憶

は人が実際に体験し、心で感じたものです。「空襲で〇〇人が亡くなった」といった記録は想像をかき立てませんが、「空襲で人々が火にまかれ逃げ惑う姿を見た」という記憶は、鮮明な情景を思い浮かべさせます。修学旅行で長崎の原爆資料館を訪れ、焦げた水筒を目にしたとき、身近に感じる衝撃がありました。それこそが記録と記憶の違いです。

戦争の悲惨さを子どもたちに伝えるには、教科書も記録ではなく記憶を中心にすべきです。なぜ戦争はいけないのか、記録だけでは学べません。戦争中に人を殺してよい理由などなく、多くの命が失われるその現実こそ、戦争を否定する理由です。記録では伝えられない感情や想像力を、記憶は喚起します。

戦争体験者の記憶を直接聞ける機会は減っていますが、その記憶は語り継ぐべき未来への財産です。今回集めた貴重な記憶を冊子に残し、記憶遺産として多くの人に伝えていくことが大切です。

